

しんぱん
しどうようもんしゅう
新版 指導要文集

だいさんしゅう
しゅくめいてんかん
第三章 宿命転換

りんじゅう
臨終

か でん み い まい いぎよう み ようや

彼の伝を見るに、云わく「今畏の遺形を觀るに、漸く

しゆくしよう くわ こくひいんいん ほね あらわ とううんぬん

縮小を加え、黒皮隠々として骨それ露なり」等云々。

か でしとう しご じごく そう あらわ 知 とく

彼の弟子等は死後に地獄の相の顯れたるをしらずして徳

挙 思 書 著 ふで い とが 書

をあぐなどおもえども、かきあらわせる筆は畏が失をかけ

し し み 漸 縮 小 かわ

り。死してありければ、身ようやくつづまりちいさく、皮

黒 ほね 露 とううんぬん ひとし のちいろ くろ

はくろし、骨あらわなり等云々。人死して後色の黒きは

じごく とう さいだ ぶつだ きんげん

地獄の業と定むることは、仏陀の金言ぞかし。

ほうおんしよう

(010 報恩抄

りんじゆう

たとい頸をば鋸くび のいぎりにて引き切り、ひ きどうをばひしぼこをもつ

突

あし

絆

う

錐

揉

てつつき、足にはほだしを打ってきりをもつてもむとも、

いのち

通

なんみようほうれんげきよう

なんみようほうれんげきよう

命のかよわんほどは、南無妙法蓮華經、南無妙法蓮華經

とな

とな じ

し

しゃか

たほう

じつぽう

と唱えて、唱え死にに死ぬるならば、釈迦・多宝・十方の

しよぶつ

ちようぜんえじよう

ごけいやく

しゆゆ

と

諸仏、靈山会上にして御契約なれば、須臾のほどに飛び

きた

て

かた

ひ

か

りようぜん

走

たま

来つて、手を取り肩に引つ懸けて靈山へはしり給わば、

にしよう

にてん

じゆうらせつによ

じゆじ

もの

おうご

しよてんぜんじん

二聖・二天・十羅刹女は受持の者を擁護し、諸天善神は

てんがい

さ

はた

あ

われ

しゆご

じやつこう

天蓋を指し旛を上げて我らを守護して、たしかに寂光の

ほうせつ

おく

たも

嬉

宝刹へ送り給うべきなり。あらうれしや、あらうれしや。

036 如説修行抄

によせつしゆぎようしよう

りんじゆう

臨終 605 ページ 3 行

はくがい う

くび のこぎり ひ き

どう ほこ やり

(迫害を受けて) たとえ頸を 鋸 で引き切られ、胴をひし鉾 (槍

ぶき

あし あし

きり

のような武器) でつきさされ、足には足かせをされたうえ、錐でもま

いのち

なんみようほうれんげきよう

れたとしても、命のあるかぎりは、南無妙法蓮華經・

なんみようほうれんげきよう

だいもく

とな

とな

し

しやか

南無妙法蓮華經と題目を唱えに唱えて死んでいくなれば、釈迦・

たほう じつぼう しょうぶつ

りようぜんえじよう

やくそく

多宝・十方の諸仏が、靈山会上で約束されていることなので、

しゆんかん と

き

て

と

かた

りようぜん

つ

瞬間に飛んで来て、手を取り、肩にかけて、靈山にたちまち連れ

やくおうぼさつ

ゆぜぼさつ

にしよう

じこくてんのう

ていってくださるのです。藥王菩薩と勇勢菩薩の二聖、持国天王と

びしゃもんでんのう にてん

じゅうらせつによ

ごほんぞん たも

もの

毘沙門天王の二天、そして十羅刹女が、御本尊を持つてきた者をか

まも

しよてんぜんじん てんがい

さ

はた

ばい護り、諸天善神は天蓋（きぬがさ）を指しだし旗をかかけて

わたし

しゅご

じょうじゃつこう

ぶつこくど

おく

私たちを守護して、たしかに常寂光の仏国土に、送りとどけて

くださるはずなのです。なんとうれしいことではありませんか。

わ で し とう なか しんじん うす もの りんじゅう とき あびごく
我が弟子等の中にも信心薄淡き者は、臨終の時、阿鼻獄

そう げん
の相を現ずべし。その時、我を恨むべからず

041 顕立正意抄

りんじゅう
臨終 640 ページ 14 行

わたし でし しんじん よわ もの りんじゅう じごく
私の弟子たちのなかでも信心の弱い者は臨終のときに地獄の

そう
相になつてしまふでしょう。そのときになつて私（日蓮）を恨んで
はなりません。

われ　めつ　とうたい　けじよう
我らが滅する当体は「化城」なり。この滅を滅と見れば、
けじよう　ふめつ　めつ　ちけん　ほうしよ　い
「化城」なり。不滅の滅と知見するを、「宝処」とは云う
なり。

（095　おんぎくでん
御義口伝）

りんじゆう
臨終　1023　ページー17行）

にちれん

ねんぶつしや

どうぎぼう

えんちぼう

むけんじごく

そこ

日蓮こそ「念仏者よりも道義房と円智房とは無間地獄の底

墮

もう

ひとびと

ごりんじゆう

におつべし」と申したりしが、この人々の御臨終はよく

そつら

候いけるか

(107種々御振舞御書

しゅじゅおんふるまいごしよ

りんじゆう

臨終

1245

ページー6行)

ひとし のちおも
人死して後重きは、地獄へ墮つる相なり。

こうにちしようにんごへんじ
111 光日上人御返事

りんじゅう
臨終
1265
ページー7行

なにとなくとも一度の死は一定なり。いちど し いちじよういろばしあしくて色 悪

人にわらわれさせ給うなよ。ひと 笑 たも きようだいしよう

171 兄弟抄

臨終りんじゆう
1475 ページ 5 行

なんみようほうれんげきよう

しで やま

杖 柱

たま

南無妙法蓮華經は死出の山にてはつえはしらとなり給え。

しゃかぶつ

たほうぶつ

じようぎようとう

しぼさつ

て

と

たも

釈迦仏・多宝仏・上行等の四菩薩は手を取り給うべし。

にちれん 先

た そうら

おんむか

そうろう

日蓮さきに立ち候わば、御迎えにまいり候こともやあ

先

い

たま

にちれんかなら

えんま

らんずらん。またさきに行かせ給わば、日蓮必ず閻魔

ほうおう

くわ

もう

そうろう

すこ

虚

ごと

法王にも委しく申すべく候。このこと少しもそら事ある

にちれん

ほけきよう

もん

つうそく

べからず。日蓮、法華經の文のごとくならば、通塞の

あんないしや

いっしん

しんじん

りようぜん

ご

たま

案内者なり。ただ一心に信心おわして靈山を期し給え。

やげんたどのごへんじ

(246 弥源太殿御返事

りんじゅう

臨終 ページ5行

1699

くろうるし しろいもの い しろいろ よにん おんつみ うるし

黒漆に白物を入れぬれば白色となる。女人の御罪は漆

なんみようほうれんげきよう もんじ しろいもの ひと

のごとし、南無妙法蓮華經の文字は白物のごとし。人は

りんじゆう とき じごく お もの くろいろ うえ みおも

臨終の時、地獄に墮つる者は黒色となる上、その身重き

ちび いし ぜんにん しちしやくはつしやく

こと千引きの石のごとし。善人は、たとい七尺八尺の

よにん いろくろ もの りんじゆう いろへん しろいろ

女人なれども、色黒き者なれども、臨終に色変じて白色

かる がもう やわ とろ

となる。また軽きこと鵝毛のごとし、軟らかなること兜羅

めん

綿のごとし。

(266 千日尼御前御返事 (雷門鼓御書)

せんにちあまごぜんごへんじ らいもんのつづみごしよ

りんじゆう

臨終 1745 ページ 14 行)

うるし

い

しろいろ

じよせい

ざいしよう

うるし

漆におしろいを入れると。白色になります。女性の罪障は漆

なんみようほうれんげきよう もじ

のようなもので、南無妙法蓮華經の文字はおしろいのようなもので

ひと りんじゆう

むか

じごく

お

もの

くろいろ

す。人は臨終を迎えたとき地獄に堕ちる者は黒色になります。そ

からだ おも

つな

せんにな

ひ

おお

のうえ、身体が重いことは、綱をかけて千人がかりで引くほどの大

いし

ぜんにな

ななしやくはつしやく

おお

きい石のようです。善人はたとえ七尺八尺というからだの大き

じよせい

いろ くろ もの

りんじゆう

いろ

しろいろ

か

い女性であつても、色の黒い者であつても、臨終に色が白色に変

からだ かる

がちよう け

わります。また身体が軽いことは鷺鳥の毛のようであり、やわらかな

めん はな

ことは綿の花のようなものです。

せん りんじゅうただいま

さと しんじん いた

詮ずるところ、臨終只今にありと解つて信心を致して

なんみょうほうれんげきょう とな ひと みょうじゅう

南無妙法蓮華經と唱うる人を、「この人は命終して、

せんぶつ みて さず くふ あくしゅ お

千仏の手を授け、恐怖せず、悪趣に堕ちざらしめたもうこ

う と そうろう よろこ いちぶつにぶつ

とを為」と説かれて候。悦ばしいかな、一仏二仏にあ

ひやくぶつにひやくぶつ せんぶつ らいごう て と

らず、百仏二百仏にあらず、千仏まで来迎し、手を取り

たま かんき かんるい お がた

給わんこと、歡喜の感涙押さえ難し。

しょうじいちだいじけつみやくしやう

(276 生死一大事血脈抄

りんじゅう

臨終 ページ 3 行

1775

りんじゅう ただいま じかく しんじん はげ

ともあれ、臨終のときは只今であると自覚して信心に励み、

なんみようほうれんげきよう

とな

ひと

ほけきようふげんぼさつかんぼつぽん

南無妙法蓮華經と唱えている人は、法華經普賢菩薩勸發品

だいにじゅうはち

じゅみよう

お

せんぶつ

て

さず

おそ

第二十八に「壽命が終わつてのち、千仏が手を授けて、恐れもな

くる

きようがい

お

く、苦しみの境界に堕ちることもないようにしてくださるであろ

と

よろこ

いちぶつ

う」と説かれていますとおりになるのです。喜ばしいことです。一仏

にぶつ

ひやくぶつ

にひやくぶつ

せんぶつ

むか

き

や二仏ではなく、百仏や二百仏でもなく、千仏までもが迎えに来

じようぶつ

きようがい

て

みちび

てくれて、成仏の境界へと、手をとって導いてくださることを

おも

よろこ

なみだ

なが

思えば、喜びの涙がとめどなく流れます。

あいかま

あいかま

ごうじよう

だいしんりき

いた

相構えて相構えて、強盛の大信力を致して、

なんみようほうれんげきようりんじゆうしようねん

きねん

たま

南無妙法蓮華経臨終正念と祈念し給え。

しようにいちだいにじけつみやくしように

(276 生死一大事血脈抄

りんじゆう

臨終

1777

ページー1行)

ごころ

ごうじよう

しんじん

つらぬ

なんみようほうれんげきよう

心して強盛な信心を貫いて、たえず南無妙法蓮華経・

りんじゆうしようねん

いの

臨終正念と祈っていきなさい。

さいし

けんぞく

しびと

ぜんご

争

ごくそつ

あ

妻子・眷属の死人の前後にあらそいゆくは、獄卒・阿

ぼうらせつ

さいしとう

悲

泣

ごくそつ

声

防羅刹なり。妻子等のかなしみなくは獄卒のこえなり。

うえのどののごけあまごへんじ

297 上野殿後家尼御返事

りんじゅう

臨終

1834

ページー6行

ひと せんぜ しゆくごう

この人は先世の宿業か、いかなることぞ、臨終に

りんじゆう

なんみようほうれんげきよう とな

たま

いちげん

亀

南無妙法蓮華経と唱えさせ給いけることは、一眼のかめの

う ぎ あな い

てん

くだ

糸

だいち

針

あな

い

浮き木の穴に入り、天より下すいとの大地のはりの穴に入

不思議

るがごとし。あらふしぎ、あらふしぎ。

うえのどのごへんじ

まつぼうようほう

こと

315 上野殿御返事（末法要法の事）

りんじゆう

臨終

1874

ページー3行

あい 構

相かまえて相かまえて、あい 自他の生死はしらねども、ごりんじゅう 御臨終

刻

しょうじ

ちゅうげん

にちれん

迎

参

のきざみ、生死の中間に、日蓮かならずむかいにまいり

そろう

候べし。

324 上野殿御返事 (刀杖難の事)

うえのどのごへんじ

とうじょうなん

こと

りんじゅう

臨終ページー2行

1892

こころ

じぶん

ほか

せいし

よくよく心して、自分についても他のひとについても生死はわか

ごりんじゅう

せいし

ちゅうかん

らないでしようけれども、御臨終のさいに、また生死の中間には、

にちれん

むか

い

日蓮がかならず迎えに行つてあげましょう。

りようぜん

詣

たま

ひ出

じつぼう

見

ただいまに靈山にまいらせ給いなば、日いでて十方をみ

嬉

疾

死

打

るがごとくうれしく、「とくしにぬるものかな」と、うち

喜

たま

そうら

よろこび給い候わんずらん。

ちゅうう

みち

出

来

そうら

にちれん

中有の道にいかなることもしできたり候わば、「日蓮が

弟子

名乗

たま

でしなり」となのらせ給え。

みようしんあまごぜんごへんじ

びようしりようやく

こと

361 妙心尼御前御返事（病之良薬の事）

りんじゅう

臨終 1963 ページ 16 行

たいてん

しゆぎよう

さいごりんじゆう

とき

ま

ごらん

退転なく修行して最後臨終の時を待つて御覽ぜよ。

みようかく

やま

はし

のぼ

しほう

み

妙覺の山に走り登つて四方をきつと見るならば、あら

おもしろ

ほうかいじやつこうど

るり

じ

こがね

面白や、法界寂光土にして、瑠璃をもつて地とし、金の

なわ

やつ

みち

さか

てん

ししゆ

はな降

こくう

繩をもつて八つの道を界えり。天より四種の花ふり、虚空

おんがくき

もろもろ

ぶつぼさつ

じようらくがじよう

かせ

に音楽聞こえて、諸の仏菩薩は常樂我淨の風にそよめ

ごらく

けらく

たも

われ

かず

つら

ゆげ

き、娯樂・快樂し給うぞや。我らもその数に列なりて遊戯

たの

ちか

しんじんよわ

し楽しむべきこと、はや近づけり。信心弱くしては、かか

ところ

い

い

るめでたき所に行くべからず、行くべからず。

まつのだのごへんじ

じゆうしひぼう

こと

374 松野殿御返事 (十四誹謗の事)

りんじゅう
臨終 1994 ページ 7 行

たいてん

しんじん しゅぎよう

さいご りんじゅう ま

退転することなく信心の修行をして、最後の臨終のときを待

みようがく やま はし のぼ しほう

ってごらんなさい。妙覚の山に走り登って、四方をみわたせば、な

せかい じゃっこうど

んとすばらしいことでしょうか。あらゆる世界はすべて寂光土で、

るり だいち きん なわ ねはん やつ みち

瑠璃をもって大地とし、金の縄で涅槃にいたる八つの道のさかいを

てん まんだらけ よんしゅるい はな ふ

そら

つくり、天からは曼荼羅華などの四種類の花が降ってきて、空には

おんがく き ほとけ ぼさつ じょうらくがじょう ほとけ きようち

音楽が聞こえ、もろもろの仏や菩薩は常楽我浄（仏の境地や

だいじよう さと よつ とく かぜ こころ

大乘の悟りにそなわる四つの徳のこと）の風にそよめき、心から

たの わたし くわ あそ たの

楽しんでおられるのですよ、 私たちもそのなかに加わって、遊び楽

まちか

しんじん よわ

しんでいけるのは、もう間近です。信心が弱くてはこのようなすばら

ところ

い

しい所へけっして行くことができないのです。

われ のち きた たま ひとびと くるま 召 りようぜん
我より後に来り給わん人々は、この車にめされて霊山へ
おん い そうろう にちれん おな くるま の おんむか
御出であるべく候。日蓮も同じ車に乗って御迎えに
罷 む そうろう
まかり向かうべく候。

（395 大白牛車御消息

だいびやくごしやごしようにそく

りんじゆう
臨終 2050 ページー15行

ごしようそく

い

妙

法

蓮

華

経

夜

昼

御消息に云わく「みようほうれんげきを、よるひる

唱

近

ふたこえ

高

声

となえまいらせ、すでにちかくなりて、二声こうしように

唱

ないし生

そうら

とき

色

白

となえ、乃至いきて候いし時よりも、なおいろもしろ

形

損

く、かたちもそんぜず」

408

妙法尼御前御返事

（臨終一大事の事）

みようほうあまごぜんごへんじ

りんじゅういちだいじ

こと

りんじゅう

臨終

2101

ページー6行

ほけきよう

い

によぜそうないしほんまつくきようとう

うんぬん

だいろん

い

法華經に云わく

「如是相乃至本末究竟等」

云々。

大論に云

りんじゆう

とき

いろくろ

じごく

お

とううんぬん

わく「臨終の時に色黒きは、地獄に墮つ」等云々。

みようほうあまごぜんごへんじ

りんじゆういちだいじ

こと

408

妙法尼御前御返事

(臨終一大事の事)

りんじゆう

臨終

2101

ページー8行

りんじゅう

なら

のち

たじ

なら

されば、まず臨終のことを習つて後に他事を習うべし

みようほうあまごぜんごへんじ

りんじゅういちだいじ

こと

408 妙法尼御前御返事（臨終一大事の事）

りんじゅう

臨終 2101 ページ 13 行

はじ

りんじゅう

まな

あと

ゆえに初めに臨終ということについて学んでから、その後でその

ほか ことがら

まな

他の事柄について学んでいくべきです。